

G-4 高等学校「家庭一般」の学習内容に対する生徒の興味(第4報)

広島大教育付高 道井博子

目的 先に小学校家庭科、中学校技術・家庭科の学習内容に対する児童、生徒の興味について調査したが、今回は高等学校「家庭一般」の学習内容に対する生徒の興味は学習前と学習後とではどのような変化を示すかを一対比較法によって、都市と農村の両地域について比較検討した。

方法 学習前は昭和44年5月、学習後は昭和46年2月のそれぞれの期間に、広島県の都市と農村の高等学校2校ずつ計4校の1年、2年の生徒(2年生までに4単位履修)1100名を対象に調査用紙を配布して調査を行なった。調査用紙の質問項目は、現行の高等学校家庭科学習指導要領の内容を17項目に精選し136対の項目を作成した。

結果 ①、学習したいものの順位は、すき・きらいの両極端では都市と農村とが一致しているが、中間ではその順位が異なる。②、都市、農村共に学習前の興味が低かったのは、「予算生活」「購入と消費」「住居の衛生と安全」で、興味が高かったのは、「調理実習」「被服製作」「育児と結婚」であった。学習後もすきな内容はすききらいな内容はきらいな傾向がある。③、都市において学習の前後で興味の変化が大きかったのは、「予算生活」「家事労働の能率化」「被服計画」で、農村では「生活時間の計画」「各部屋の配置」「育児と結婚」において変化が大であった。④、学習の前後2回の調査に共通して都市ではすき・きらいの内容がかなり分化しているが、農村ではすき・きらいの内容が区別されにくい傾向がある。⑤、小・中学校に比較して、高等学校では学習内容のすき・きらいの尺度の幅がせまくなっている。